

第 1 章 2009年度京都大学構内遺跡調査の概要

上原真人 清水芳裕 伊藤淳史

1 調査の経過

京都大学文化財総合研究センターは、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物の新営やそのほかの掘削工事に際し、予定地の埋蔵文化財調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果により、発掘・試掘・立合にわけて実施している。2009年度には以下のように発掘調査 4 件、立合調査 7 件を実施した（括弧内は図版 1 および表18の地点番号）。

発掘調査	理学部 5 号館北棟新営（北部構内 B H31区）	（第 3 章，図版 1 - 355）
	iCeMS研究実験棟新営（本部構内 A Z23区）	（第 4 章，図版 1 - 356）
	物理国際先端研究棟新営（北部構内 B G34区）	（整理中，図版 1 - 357）
	医学部学生会館新営（医学部構内 A Q18区）	（整理中，図版 1 - 358）
立合調査	（南部）iPS細胞研究施設周辺工事（病院構内 A G13区）	（第 1 章，図版 1 - 359）
	北部構内基幹・環境整備（ガス設備）工事（北部構内 B D31区）	（第 1 章，図版 1 - 360）
	理学部 5 号館北棟電気・ガス・給排水配管工事（北部構内 B I30区）	（第 1 章，図版 1 - 361）
	北部農業研究施設等改修（北部構内 B G35区）	（第 1 章，図版 1 - 362）
	理学研究科セミナーハウス（4 号館東）新営（北部構内 B F28区）	（第 1 章，図版 1 - 363）
	理学研究科 4 号館雨水・污水配管工事（北部構内 B E29区）	（第 1 章，図版 1 - 364）
	北部総合研究棟（旧数理解析研究所）改修（北部構内 B D35区）	（第 1 章，図版 1 - 365）
資料整理	西部構内課外活動施設新営（西部構内 A W20区）	（第 2 章，図版 1 - 348）

2 調査の成果

前節で掲げた発掘調査のうち、整理を終えたものについて、その成果を略述する。なお西部構内 A W20区、北部構内 B H31区、本部構内 A Z23区については、それぞれ第 2 章～第 4 章で詳述しているので参照されたい。

西部構内 A W20区 西部構内で本学が主体となるはじめての発掘調査を実施した。同地は、鎌倉時代の有力公卿である西園寺公経が営んだ別邸「吉田泉殿」に由来する地名が伝わることから、関連遺跡の存在が予想されてきた。調査の結果、石敷と掘込地業をとまなう建物跡や玉石の集積遺構、瓦溜や多数のかわらけ溜、精良な砂の埋積する流路や景石など、鎌倉時代の邸宅や庭園の存在を示唆する多数の遺構・遺物が検出され、伝承を裏付ける成果を得ることができた。鴨東地域の歴史的景観の復元のみならず、中世京都近郊の

開発と諸権力との関係を具体的に検討していくうえでも、重要な意義をもつといえよう。

北部構内B H31区 北部構内北辺中央に位置し、北白川扇状地の末端にあたる地点で実施した調査である。一帯は北白川追分町遺跡として、これまでも縄文時代を中心に建物跡や貯蔵穴、埋没林など数多くの成果が知られているが、今回も縄文晩期後半の加工痕ある巨木や低湿地、早期の旧地表面など、重要な発見があった。低湿な条件下で多数の有機物が良好に遺存しており、自然科学分野の多方面の協力を得て、先史時代の環境復元のための精細な分析・検討をおこなっている。縄文遺跡として考古学的検討のみならず、先史遺跡の学際的研究の成果として、重要な報告となろう。

本部構内A Z23区 本部構内北西辺に位置する地点が調査され、縄文晩期終末の平地式住居3軒の発見と、7世紀前半の終末期古墳の周溝検出が特筆される。前者については、これまで想定されてきた北部構内や吉田南構内一帯の居住域とは離れた位置にあり、また土壌や植物珪酸体などの分析からも、活発な活動や生産がなされていた空間とは想定できないという結果が得られている。住居遺構の詳細な報告とあわせて、縄文人の生活や行動様式を具体的に検討していくうえで貴重な情報が得られたと言えよう。終末期古墳については、鴨東地域の古墳時代から古代にかけての様相は不明な部分が多いなかで、貴重な類例が追加された。一帯で散発的に確認されてきた事例とあわせて、今後の総合的な研究進展が期待できるだろう。

本年度は、以上3件の発掘調査のほかに、多数の立合調査を実施しており、ほとんどの地点で各時期の遺物包含層のひろがりを確認している。幸いにして、重要な遺構や遺物を含んだ事例はないが、構内一帯に現在でも良好に遺跡が遺存している状況があらためて認識されたと言える。キャンパスの整備に際して、歴史的な資産としてこうした遺跡を活用していく方向性と、それを念頭に置いた計画的な調査研究が、求められるところであろう。